

高度医療に対応できる薬局薬剤師の育成に対する病院研修の有用性

寺腰 崇志¹⁾、齋藤 智之²⁾、矢田部 憲³⁾、酒井 雅人⁴⁾、佐藤 邦義²⁾、
荒川 隆太郎²⁾

- 1) 株式会社あさひ調剤
- 2) 順天堂大学医学部附属順天堂医院薬剤部
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】地域包括ケアシステムでは、保険薬局と医療機関等との連携がより一層求められており、相互の機能や役割を理解することが重要である。そこで、順天堂大学医学部附属順天堂医院薬剤部の「保険薬剤師病院研修プログラム」に当社薬剤師が参加し、薬局薬剤師が病院業務を学ぶことが、高度医療に対応した臨床薬剤業務ならびにチーム医療を実践でき、地域包括ケアシステムの下で患者と医療機関、薬局をつなげる薬剤師の育成に対して有用であるかを検討した。

【方法】2019年1～4月までに、14診療科での「病棟業務」を中心に、「外来化学療法指導」「医薬品情報」「化学療法調製関連業務」などの業務研修を経験した。また、チーム医療の経験するためにカンファレンスや回診に参加し、エビデンスを用いた評価・検討を学ぶために月次の研究課題報告会で発表した。さらに、週次の院内勉強会や大学院講義に参加し、最新のエビデンスを踏まえた薬物治療や、がん専門・感染症に関する専門的な知識を習得した。なお、本研修は6月まで実施される予定である。

【結果】化学療法関連業務では、がん種の特徴を意識した服薬指導の重要性を理解し、ガイドラインを知ることで薬剤からがん種の特徴や病気のある程度予測できることを学んだ。病棟業務においては、例えば脳神経内科病棟でのパーキンソン病症例、食道・医外科、呼吸器科での種々のがん症例など、保険薬局で取り扱うことが少ない症例に関わることができた。また、循環器内科と心臓血管外科では抗血栓療法について学び、保険薬局でも経時的に記録を管理し、これに基づく服薬指導を行う重要性を感じた。また、代謝酵素を意識した相互作用の確認の重要性を学び、かかりつけ薬剤師による服薬一元管理の重要性を実感した。様々な場面において、例えば「病院からの指導内容は薬情ではなく手帳に書いたほうが良いのか」などの、双方の役割を理解し、薬薬連携をスムーズに行うための質問や提案などを受けた。

【考察】本研修への参加で、新たな知見を得たことはもちろん、保険薬局業務の課題

などを認識できた。また、チーム医療の一端を経験でき、病院業務や薬物治療への理解が進み、薬薬連携の活性化に向けた有用な情報が得られた。病院業務を薬局薬剤師が体験することは、保険薬局の高度薬学機能の発揮や医療機関との連携を促すきっかけとして有用と考える。

【キーワード】地域包括ケアシステム、薬薬連携、病院研修

(第52回日本薬剤師会(2019年10月, 下関)にて発表)